南あわじ市文化財調査報告書　第３集

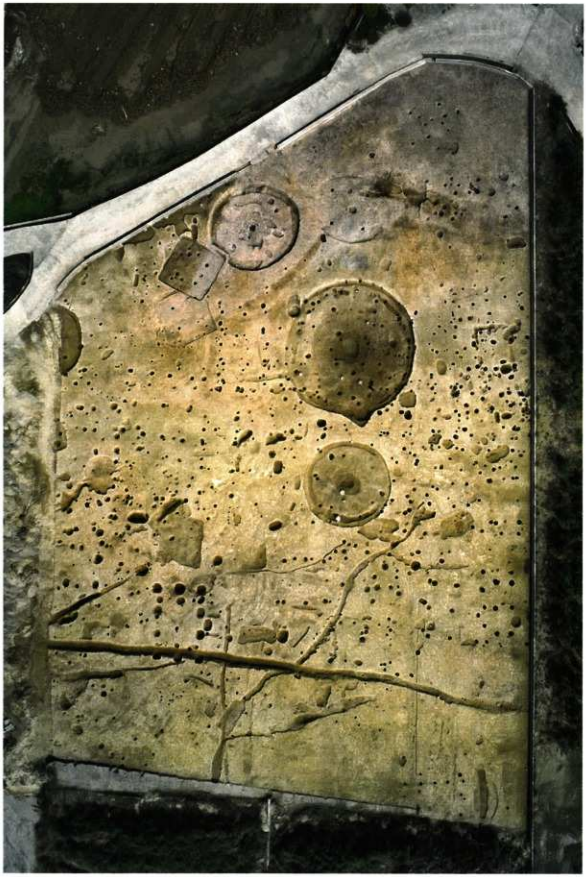
南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ

２００６年度　埋蔵文化財調査

２０１０年３月

南あわじ市教育委員会

木戸原遺跡　4次調査　I区（上が東）



木戸原遺跡　5次調査　A区（上が北）

九蔵遺跡　4次調査　遺構10　曲物出土状況（東より）

九蔵遺跡　4次調査　遺構10　出土曲物

はじめに

南あわじ市誕生から5年が経ちましたが、広大な農地を有する南あわじ市では、現在も圃場整備事業を主とする大規模開発が続いております。

このたび、平成18年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の成果を報告させていただくことになりました。この年も大規模な圃場整備事業に伴った調査が行われ、年間調査面積は埋蔵文化財調査事務所設置以来、最大量となりました。中でも平成17年度より継続して調査を行った木戸原遺跡は、勾玉や管玉といった様々な滑石製品や韓式系土器・鉄鏃などの出土品や大型建物から、古墳時代の中央政権であった大和王権と結びつきを持った拠点的集落であったと考えられ、当市の歴史を考える上でも重要な遺跡となりました。このように、発掘調査の成果によって地域の歴史も序々にではありますが、解明していきつつあり、文化財行政にとっても非常に喜ばしいことと言えるでしょう。

今回刊行いたします年報は、調査概要という形で不十分さもあるとは思いますが、今後もさらなる努力により地域史の解明と当市の文化財保護と理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、厚く感謝を申し上げます。

南あわじ市教育委員会
教育長　塚本圭右

例言

1．本書は、南あわじ市教育委員会が2006（平成18）年度に実施した、埋蔵文化財調査の記録である。

2．調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的崎薫・谷口梢（現丸亀市教育委員会）・清岡廣子（現香芝市教育委員会）が担当した。

3．出土遺物の整理作業は、赤井友美・市場一也・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・新崎都・筒井健司・富岡美早子・豊田亜希子・桝本早苗・三宅靖子・濵崎真紀・濱本善美が行った。

4．本書の編集は、的崎が行った。執筆・レイアウトは文末に記している。調査担当者については、調査一覧表に記す。

5．各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、多くの方々のご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する（敬称略）。

石野博信・伊藤宏幸・浦上雅史・大平茂・定森秀夫・杉井健・村上恭通・森岡秀人・森本徹・山上雅弘・渡辺昇

目　　次

巻頭写真図版

はじめに

例　　言

第1章　埋蔵文化財事業の動向 …… 1

第2章　埋蔵文化財調査の成果

第1節　埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図 …… 2

第2節　主な埋蔵文化財調査の成果

1　木戸原遺跡（4・5次調査）…… 4

2　久保ノカチ遺跡（1次調査）・高荻遺跡（3次調査）…… 18

3　九蔵遺跡（3次調査）…… 20

4　九蔵遺跡（4次調査）…… 26

5　久保ノカチ遺跡（2次調査）…… 32

6　木戸原遺跡（6次調査）・立石遺跡（1次調査）…… 38

7　岸ノ上遺跡（1次調査）…… 40

8　才門・石田・神子曽遺跡（1次調査）…… 41

9　中鳥遺跡（2次調査）…… 44

第１章　埋蔵文化財事業の動向

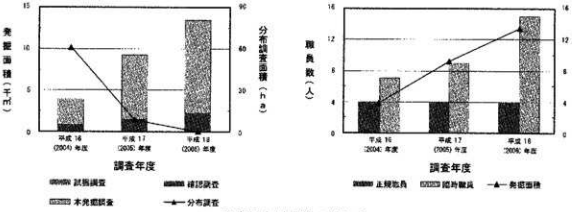
平成18年度は、分布調査１件、試掘調査１件、確認調査７件、本発掘調査４件の調査をそれぞれ行った。試掘（12㎡）・確認（2,188㎡）・本発掘調査（11,190.7㎡）の合計調査面積は13,390.7㎡で平成17年度（9,248.8㎡）の約1.5倍の調査量となる。

主な発掘調査は、県営圃場整備事業の市西地区（市新～三條）・大日川東地区（貨集福井）・御陵地区（貨集鍛冶屋～貨集）、団体営圃場整備事業の東沖田地区（阿万東町）・伊賀野地区（北阿万伊賀野）・八幡地区（貨集八幡南）などで実施しており、これまで同様に圃場整備事業に伴う調査の割合が非常に高いのが特徴となっている。

年　度	分布調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数 正規	職員数 臨時
平成16(2004)年度	60.8	0.0	833.0	3,050.3	3,883.3	4	7
平成17(2005)年度	8.6	24.0	1,464.0	7,760.8	9,248.8	4	9
平成18(2006)年度	0.1	12.0	2,188.0	11,190.7	13,390.7	4	15

＊単位：分布調査（ha）調査面積（㎡）臨時の職員数はその年度ののべ人数

調査量と職員数の推移１



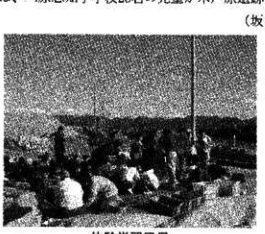
調査量と職員数の推移２

主な調査成果としては、市西地区（木戸原遺跡）では弥生時代～中世にかけての遺構・遺物、大日川東地区（久保ノカチ遺跡）では中世を中心とする集落、東沖田地区（九蔵遺跡）では弥生時代～中世にかけての遺構・遺物等を確認した。特に市西地区（木戸原遺跡）では古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物が広範囲で見つかる等大きな成果となった。

啓蒙普及活動としては、５月29日～６月２日にトライやるウィークで南淡中学校の３名の生徒が市内の遺跡めぐりや発掘作業等を行った。また11月７日には、三原志知小学校23名の児童が木戸原遺跡において発掘作業の体験学習を行った。

（坂口）

トライやる作業風景

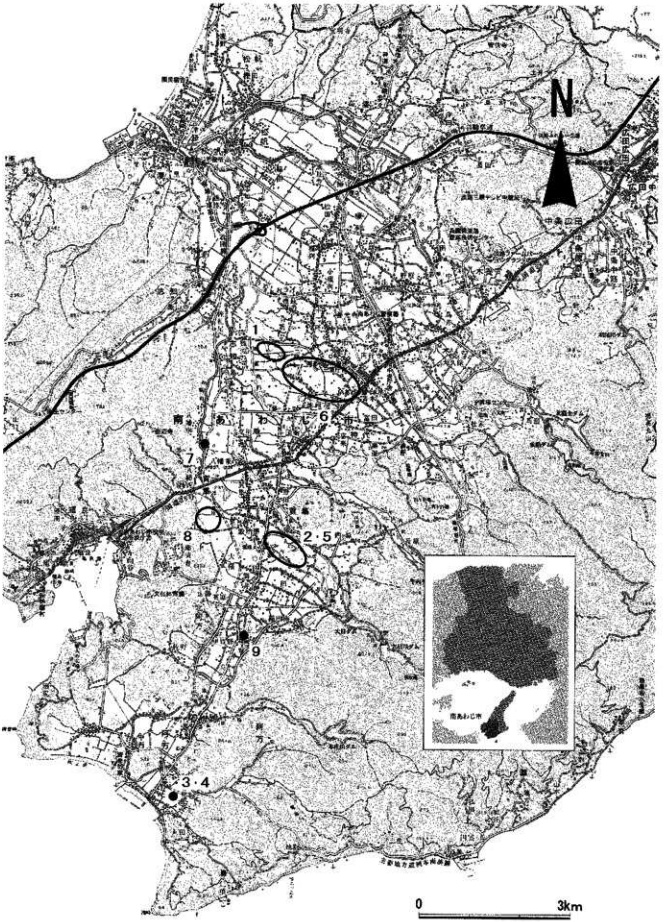


体験学習風景

第２章　埋蔵文化財調査の成果

第１節　埋蔵文化財調査一覧表及び調査位置図

No.	事業名	所在１	所在２	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要
1	経営体育成基盤整備事業（市西地区）	市	三條～新	本発掘	定松・的崎・坂口・山崎・谷口・清岡	木戸原	H18. 5.15～H19. 1.19	弥生時代～中世にかけての遺構・遺物を確認。特に古墳時代の掘立柱建物や竪穴住居が広範囲でみつかり、土師器・須恵器・韓式系土器のほかに滑石製品やガラス玉などが出土。
2	経営体育成基盤整備事業（大日川東地区）	賀集	福井	確認	坂口・山崎・谷口	久保ノカチ・高萩	H18. 6.15～7.28	弥生時代中期と中世の遺構・遺物を確認。
3	基盤整備促進事業（東沖田地区）	阿万	東町	確認	山崎・谷口	九蔵	H18. 6.19～28	弥生時代～中世の遺構・遺物を確認。
	住宅建設事業	湊	里	確認	坂口	湊城跡	H18. 7.24	遺構・遺物未確認。
4	基盤整備促進事業（東沖田地区）	阿万	東町	本発掘	山崎・谷口	九蔵	H18. 7.24～10.13	弥生時代～中世の遺構・遺物を確認。律令期の掘立柱建物・中世の井戸などを検出。
5	経営体育成基盤整備事業（大日川東地区）	賀集	福井	本発掘	坂口・山崎・谷口	久保ノカチ	H18. 8.21～H19. 3.23	弥生時代の遺構・遺物と鎌倉時代～室町時代の集落を確認。
6	経営体育成基盤整備事業（市西地区）	市	三條～福永	確認	定松	木戸原・立石	H18. 9.25～11.15	木戸原遺跡の続き（中世）と、立石遺跡は弥生時代後期・中世の遺構・遺物を確認。
7	基盤整備促進事業（八幡地区）	賀集	八幡南	確認	坂口	岸ノ上	H18.10. 2～13	古墳時代～中世の遺構・遺物を確認。
	基盤整備促進事業（伊賀野地区）	北阿万	伊賀野	確認	坂口	下中原・中島	H18.10.17～31	中世の遺構を確認。
8	経営体育成基盤整備事業（御陵地区）	賀集	鍛冶屋～賀集	確認	山崎	才門・石田・神子曽	H18.10.18～H19.2.5	律令期の遺構・遺物を確認。
9	基盤整備促進事業（伊賀野地区）	北阿万	伊賀野	本発掘	坂口	中島	H18.11.13～30	中世～近代の遺構・遺物を確認。
	分譲住宅建設事業（民間）	神代	国衙	分布	坂口		H18.11.30	遺物わずかに採集。
	分譲住宅建設事業（民間）	神代	国衙	試掘	坂口		H18.12. 6	遺構未確認。

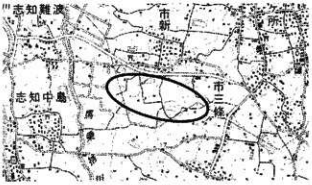


調査位置図

第2節　主な埋蔵文化財調査の成果

1　木戸原遺跡　－4・5次調査－

所在地	市三條～市新字西光寺外
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	定松佳重・的崎薫・坂口弘貢・山崎裕司・谷口梢・清岡廣子
種　別	本発掘調査
調査期間	平成18年5月15日～平成19年1月19日
調査面積	7,615㎡

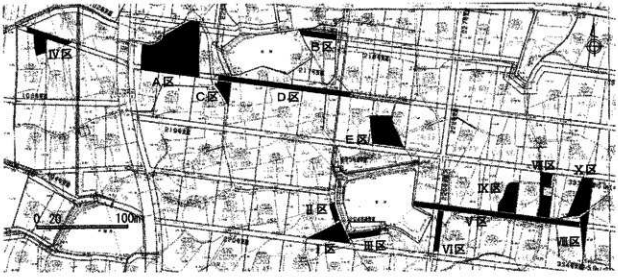


調査の位置

1　調査内容

本調査対象地は三原平野西～中央部の扇状地上に位置し、標高6.2～18.3mを測る田園地帯である。

上記事業に伴って平成17年に行った本発掘調査（2・3次調査）では弥生時代・古墳時代・律令期・室町時代の遺構を確認し、中でも古墳時代の滑石製祭祀具や鉄製品・土器などが集中して出土した。

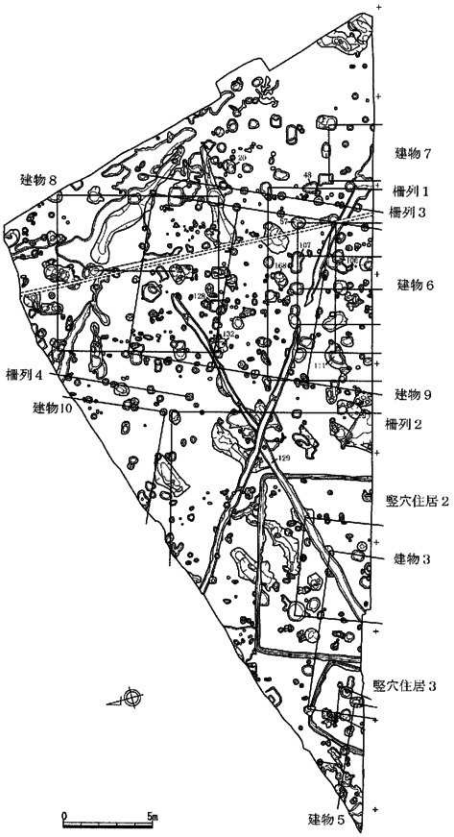


調査区設定図

【Ⅰ区】

圃場面の調査区で、面積は502㎡である。古墳時代中期の竪穴住居・掘立柱建物・柵列・土坑と律令期の溝・土坑などを確認した。この調査区は3次調査4区の北側に連続する大型建物集中区であり、4区で検出した竪穴住居や掘立柱建物の続きを調査しているため、建物番号は4区からの番号を引き継いで呼称する（『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』2009年参照）。

竪穴住居2　東西辺が10.0mで南北辺が10.8mの巨大な方形住居で、柵列2によって北と東側が囲まれていることがわかった。建物の規模などから一般の住居ではなく、特殊な建物と考えられる。4本の主柱穴とその外側には1.2～1.5mの間隔で支柱穴が方形にめぐる。土師器・僅かな須恵器・軟質陶式系土

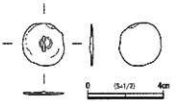


1区　平面図

器（2）と、ふるいによる埋土の精査などで臼玉7・管玉4点が出土した。管玉は碧玉製で、ほぼ同じ場所から出土していることから一連の製品である可能性が高い。

竪穴住居3　北東辺4.1m・南西辺4.7mで4本の主柱穴を確認している。土師器・須恵器・軟質輸式系土器（3）・臼玉11点が出土している。

建物6　柵列1によって区画されている。柵列を構成する遺構48より無文鏡が出土している。直径2.2cm、厚さは0.1cmである。紐は僅かな突起で表現され、実用品ではなく祭祀具として使用された可能性が高い。無文鏡の出土と総柱建物であることからこの建物は特殊な建物と考えられる。建物の柱穴より計9点の臼玉が出土している。

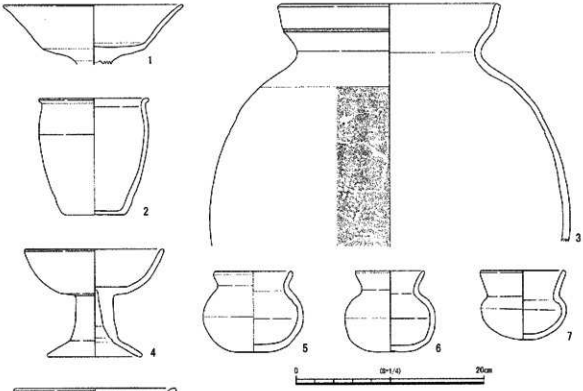


I区　建物6　遺構48　出土鏡

建物8　4×4間の建物で南北方向の屋内棟持柱を持つ。柱穴より計2点の臼玉が出土している。

建物9　側柱の柱間や柱穴の規模にばらつきが見られるが、桁行2間おきに相対する両妻柱を結ぶ柱穴が見られることから間仕切柱を持つ建物と思われる。この建物の東側には柵列3が並ぶ。

主な遺構の前後関係は、建物6・7・8・竪穴住居2→竪穴住居3→建物5・9・10→建物3となり、この集落の最盛期は建物6・7・8・竪穴住居2の時期と考えられる。



I区　竪穴住居2　1・2
竪穴住居3　3～8

【A区】

圃場面の調査区で面積は2,854㎡である。円形竪穴住居5棟・方形竪穴住居7棟・掘立柱建物42棟・溝・土坑・墓など弥生時代後期・古墳時代中期・律令期・中世の遺構を多数確認した。

竪穴住居3　長径11.2m・短径10.7mの大型円形住居である。中央土坑は2段になっており、外輪の長

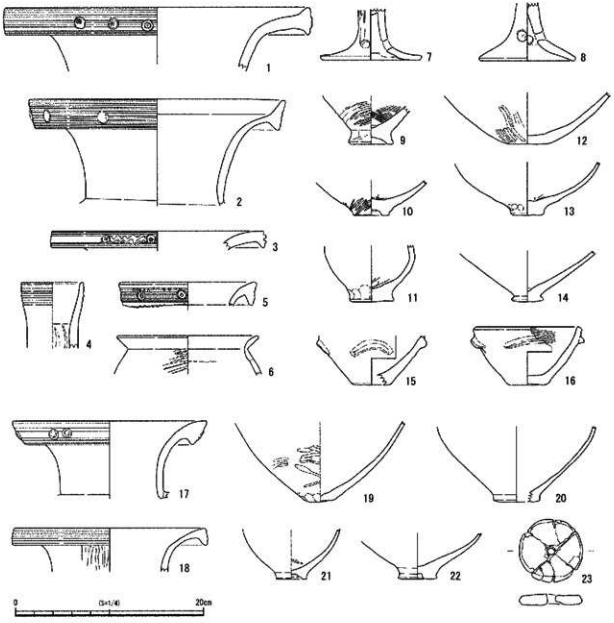
建物16
棟列1
建物12
建物3
建物42
建物1
建物13
遺構490
建物4
建物11
建物10
建物7
遺構536
建物2
建物15
建物14
竪穴住居3
竪穴住居1
竪穴住居6
遺構571
建物6
建物5
竪穴住居4
建物9
建物8
竪穴住居2
建物17
建物20
建物21
建物18
建物40
建物33
竪穴住居7
建物19
棟列2
建物27
遺構195
建物22
建物26
建物32
竪穴住居8
建物28
建物39
遺構105
建物37
竪穴住居12
建物23
遺構445
建物29
建物38
建物31
竪穴住居11
建物30
竪穴住居5
建物24
遺構142
遺構6
建物34
建物25
棟列3
建物35
建物36
竪穴住居9
棟列5
棟列4
建物37
竪穴住居10
遺構1
0
5m

A区　平面図

径3.5m・短径2.6m、内輪の長径1.7m・短径1.2mを測る。外輪部に4本柱がある。周壁を切り込む形で直径20cmの柱穴が等間隔で並ぶ。側壁擁護杭の可能性もあるが、壁を切っていることから壁を立てるための支柱と思われる。弥生時代後期の土器が出土している。中には弧状に粘土を貼り付けて把手状にした小型の鉢（15・16）が数点出土しているが、あまり類例を見ない。

竪穴住居4　直径7.2mを測る円形の焼失住居である。五角形に炭化物が認められ、主柱穴が5本であることから、棟木の痕跡と思われる。台石と思われる扁平な石が2つ住居内より出土しているが、南側の台石は炭化物の上層より出土しているため、焼失後廃棄の可能性が高い。炭化物の堆積層上層より土製紡錘車が出土し、直径6.4cm、厚さ1.2cmを測り、端部は三角形に張り出している。

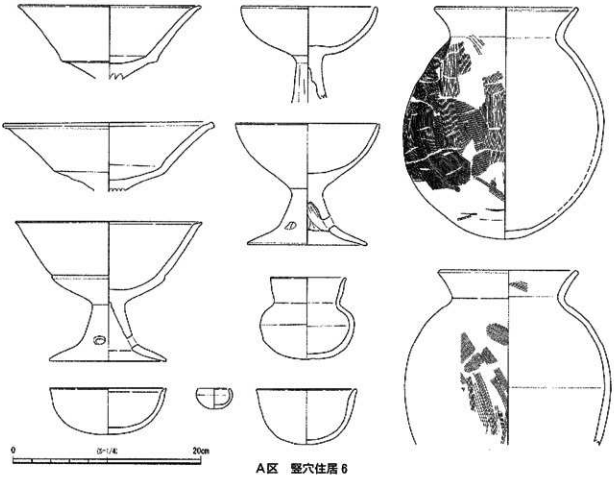
竪穴住居3と4は規模・距離から併存は難しいと思われる。しかし、弥生時代後期中頃の範疇からは外れないためさほど時間差はないが、住居3の土器の方がやや古い要素を持っている。



A区　竪穴住居3　1～16　竪穴住居4　17～23

竪穴住居6　5.0×4.6mを測る古墳時代中期の方形住居である。4本柱で住居西角隅に竈跡と思われる赤変部を確認した。竈の上部構造や支柱は未確認である。南東辺付近に土器が楕円形に散在している。土器は高坏が大半を占め、円の中心付近には地山である黄色系粘質土が2ヶ所で台状をなしていた。この住居からは土師器の他に、須恵器・鉄鏃・ミニチュア土器9・ガラス玉1・滑石製臼玉21点が出土している。土器と臼玉のほとんどが住居埋土下層からの出土であり、この土器群の状態は廃絶後の住居のくぼみを利用した祭祀状況を現していると考えられる。他の住居からは体部が球胴化した甕が出土しているが、住居6からはやや長胴化した甕が出土している。

方形竪穴住居は6・7と8～12にグループ分けでき、後者が先行する。

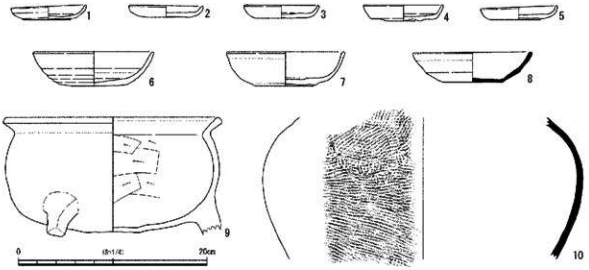


A区　竪穴住居6

建物1　1間の柱間は狭く、1.0～1.5mである。柱穴からの遺物は少ないが、弥生土器が出土している。この建物と平行する東側の溝からは、弥生土器が多く出土し、建物1は弥生時代の建物である可能性が高い。

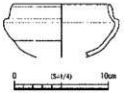
建物6　2×2間の建物で北側に庇が付く。建物を構成する柱穴である遺構536からは土師器二足鍋の脚部や肩部に平行タタキの上から花文状の模様を施した須恵器の甕が出土した。遺構571からは大小の大きさに大別できる土師器や須恵器が出土した。直径7～8cmの底部糸切りの土師器皿が9個体以上、14cm前後の須恵器碗が1個体と土師器碗が2個体である。地鎮を行った可能性が高い。

建物16　おそらく4面に庇が付く大型の建物で、1間が1.7～2.7mである。土師器や須恵器捏鉢が出土している。



A区　建物6　遺構571　1～8　遺構536　9・10

建物23　建物の柱穴である遺構1052から須恵器模倣土師器の坏が出土している。このような土器は南あわじ市内では雨流遺跡・辻ノ内遺跡・片山遺跡から出土している。

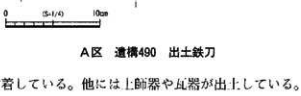


A区　建物23　遺構1052

建物33　2×3間の建物で梁行・桁行ともに1間1.8mである。柱穴は方形もしくは楕円形を呈し、0.5～0.9mの大型柱穴である。桁行の北側と南側の柱間中央にはやや小さめの柱が梁行と筋を揃えて並ぶ。間仕切りの可能性も考えられる。柱穴から律令期の土師器・須恵器・円面硯の脚部片・製塩土器（丸底Ⅳ式）が出土している。

掘立柱建物で時期が明確な建物は半数に満たないが、現段階で確実なものだけを大まかに整理すると、弥生時代後期は建物1、古墳時代中期は建物23・29、奈良時代後半～平安時代初頭は建物30・33、鎌倉時代の掘立柱建物は全て併存するのではなく、建て替えなどで数時期に分かれ、建物3～8・12・13・15・16・25・26となる。

遺構1・6・142・195・490・945　古墳時代の土師器が大量に含まれる土坑で、これらの遺構から計19点の臼玉を確認している。遺構6には韓式系陶質土器片も含まれていた。遺構490のほぼ中央には、1辺0.6×1.0mの長方形を呈する中世墓が重複し、全長約30.7cmの鉄刀が一振埋葬されており、鞘と考えられる木質片が鉄刀に付着している。他には土師器や瓦器が出土している。



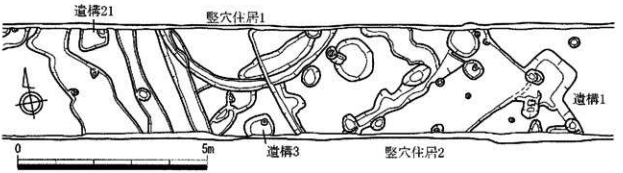
A区　遺構490　出土鉄刀

【D区】

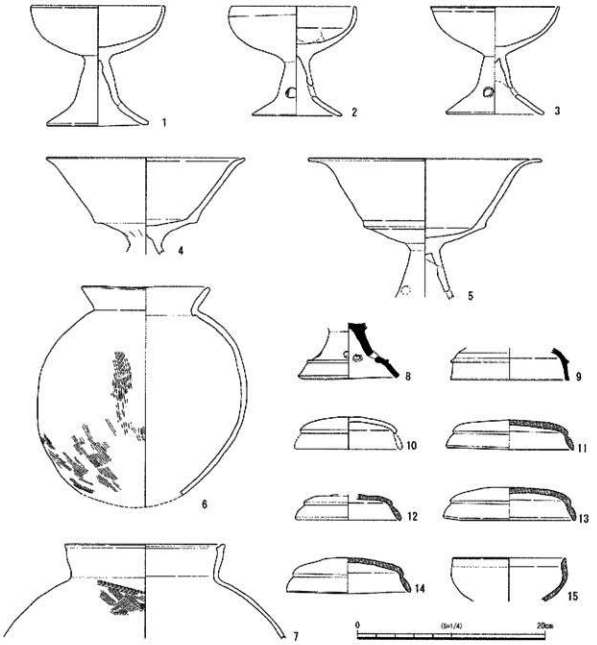
幅3mの東西水路で、全長148m、面積444㎡の調査区である。弥生時代後期の竪穴住居1棟と溝、古墳時代中期の竪穴住居5棟・土坑・溝、中世の溝などを確認した。

竪穴住居1　弥生時代後期の円形住居で、床面には炭化物を広範囲で確認している。

竪穴住居2　この地区の西側に位置する古墳時代の方形住居である。埋土からは土師器・須恵器・ガラス玉5・滑石製臼玉112・勾玉3・有孔円板2・管玉1点と未製品の臼玉1・勾玉1・剣形1・管玉6点が出土している。多量に出土した土師器の中には、古代の黒色土器のように内外面を研磨して黒化処



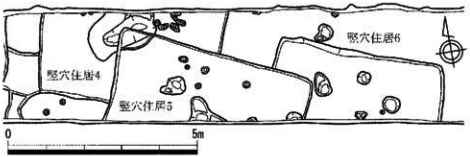
D区　平面図1



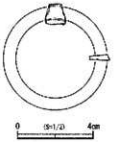
D区　竪穴住居2

理した黒色の土師器が含まれる（11～15）。器種は須恵器を模倣した坏身・坏蓋のほかに鉢があり、坏蓋の割合が多い。近畿圏ではこのような黒色の土器は朝鮮半島に系譜を持つ瓦質土器の一つとする考えもあるが、出土量が少なく定かではない。また、須恵器の坏蓋を模倣した黒色ではない土師器（10）も出土している。これは既に須恵器模倣土師器と呼ばれているので、前述の土器は須恵器模倣黒色土師器といえるかもしれないが、今回は単純に黒色土師器と仮称しておく。須恵器は非常に少なく、上層から5孔の円形透かしを持つ低脚高坏の脚部などが出土している。

竪穴住居6　地区の東端に位置する方形の竪穴住居で、土師器・黒色土師器・臼玉27・F1玉未製品1点と滑石片が出土した。このほかに鏡の内区部分と考えられる約1cm角の青銅片が出土している。鏡種は不明であるが、錆などが全く見られないことから良質な銅と考えられ、舶載鏡片の可能性が高い。

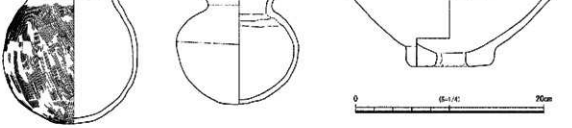


D区　平面図2



D区　竪穴住居6　出土鏡

遺構3　黄色粘土を張った土坑で、粘土層の直上より古墳時代の土師器が多く出土した。土師器の中に、直径10cm前後の厚みのあるしっかりした底部から直線的に上部外方に伸びる体部を持つ擂鉢形の鉢が出土しているが、底部中央には3cm大の穿孔が施される。このような有孔鉢はA地区竪穴住居6や7などでも底部のみが出土している。島内外でもこの時期としては珍しい器形であり、その使用法については甑とも考えられるが、把手付きの甑も出土していることから、祭祀関連の土器の可能性も考えられる。



D区　遺構3

【E区】

調査区の調査区で面積は943㎡である。古墳時代と鎌倉時代の大きく2時期の遺構があり、竪穴住居7棟と竪穴状遺構2基・掘立柱建物2棟・柱穴・土坑・土壙墓などを確認している。

竪穴住居2　土師器・黒色土師器・ガラス玉1・臼玉39・剣形1・有孔円板2点・滑石片・鉄片が出土している。また8cm大の滑石の原石や小さな砥石も出土している。

竪穴住居5　南端部からは土師器が多く出土し、黒色土師器も含まれている。幅広のハケメが明瞭に残る土器片を確認し、東海系のS字状口縁台付甕の系譜を引くいわゆる宇田型甕片と考えられる。その他

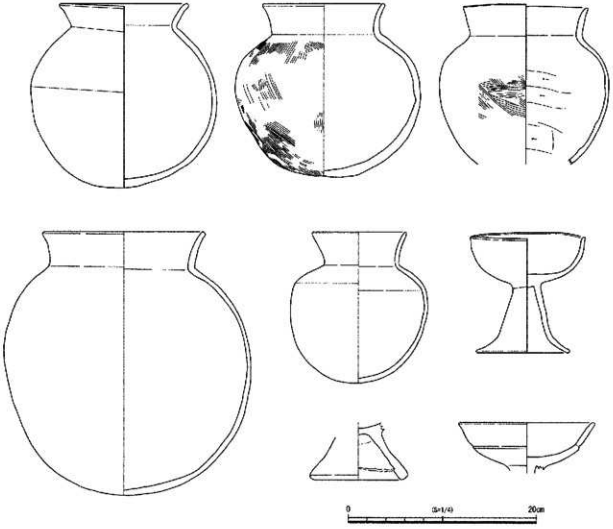
E区　平面図

に臼玉20・勾玉1・管玉1点・滑石片・鉄片が出土している。

竪穴住居6　土師器・須恵器・韓式系土器・黒色土師器・製塩土器・玉類・滑石片・鉄片が出土している。須恵器は少ないが、有蓋高坏の蓋部やはそうが出土している。住居のほぼ中央部分において焼土を確認し、製塩土器の丸底I式がその周辺から小片となって多く出土する。このことから小規模な鍛冶を行っていた可能性も考えられる。玉類の出土も多く、ガラス玉5・臼玉74・勾玉1・有孔円板1点を数える。

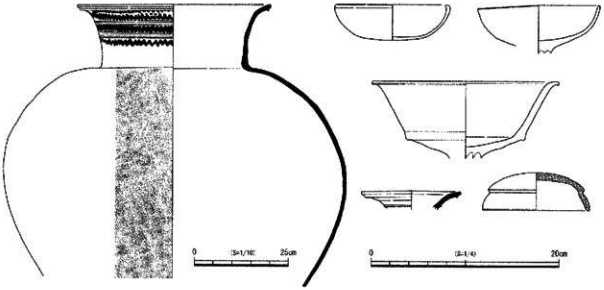
竪穴住居7　完形に近い土師器が多く出土し、中には字田型甕の脚部と思われる土器片や須恵器も含まれる。臼玉21・勾玉1・勾玉未製品1点・滑石片・鉄片が出土している。滑石片は数点が勾玉未製品と同質の滑石片と肉眼観察できることから、勾玉製作時に出たものと考えられる。

竪穴住居は切り合いなどから竪穴住居1・3・5・7と2・4・6の2時期に分けられる。前者のグループは南北に長い長方形で住居の深さが深い傾向にある。竪穴住居7は主軸が他の3棟よりやや東に振っていることから、竪穴住居7はこのグループの中では別と考えるべきかもしれない。後者のグループは東西に長い長方形で、浅い。両者の時期差はあまり無いと考えられる。この地区の竪穴住居全てにおいて竈や炉は検出されず、竪穴住居6でのみ焼土を確認した。



E区　竪穴住居7

遺構10　竪穴状遺構で隅丸長方形を呈する。土師器・須恵器・黒色土師器・ガラス片1・臼玉63・勾玉2・有孔円板1・管玉1・臼玉未製品1点・滑石片・鉄片が出土している。中層から出土した須恵器甕は口径50.7cm、推定器高約90cmとかなり大型である。細片が多く、この場で意図的に破砕した可能性が高い。出土した滑石製品の多くはこの層から出土している。



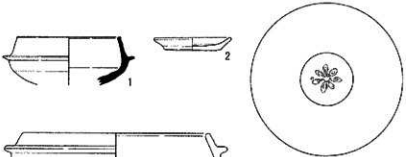
E区　遺構10

建物1　竪穴住居と主軸を揃える2×3間の建物である。竪穴住居の遺物よりやや時代が下がる須恵器坏片が柱穴から出土している。

建物2　1×3間の四面庇の建物である。柱穴から土師器・須恵器・瓦器が出土していることから、鎌倉時代の建物と考えられる。

遺構134　土壙墓である。完形の鎬連弁文青磁碗や土師器皿・羽釜が出土している。青磁碗は13世紀後半である。

遺構137　遺構134の西側にある遺構で、遺構134と同様に土壙墓である可能性が考えられる。



E区　建物1　1　遺構134　2～4

2　まとめ

木戸原遺跡は弥生時代中～後期・古墳時代中期・律令期・鎌倉時代・室町時代の遺跡であるが、今回の調査では弥生時代中期と室町時代の明確な遺構は確認できなかった。

弥生時代後期はA・D地区で明確な遺構を確認している。A地区のように大型住居を中心とし、その周辺に数棟の住居が展開して集落を営んでいたようである。この集落の墓域は確認できていない。弥生

時代後期の中でもおそらく中頃の範疇と考えられる。

古墳時代中期の早い段階では、I区と前年度の調査区である4区から集落の中心施設と考えられる大型建物群を確認している。大型建物群の南側では滑石製品などの玉類や鉄鏃が含まれた落ち状の遺構が検出され、集落の祭祀が執り行われていたと考えられる。やや時代が下がると、主に大型建物群より北側に集落が営まれ、住居内での日常的な祭祀が行われていたと推測される。E地区の遺構10では故意に破砕された須恵器大甕も出土しており、大甕祭祀も行っていたようである。

今回の調査で玉類については、D・E地区の遺構から製品だけでなく、未製品や滑石などの剥片が出土したことにより、木戸原遺跡でも玉類の生産を行っていたことが判明した。しかしながら、それは大規模な生産ではなく、小規模生産であったといえる。その根拠として、最も出土個体数の多い臼玉の未製品や製作時にでる剥片の出土が少なすぎるからである。おそらく玉類の生産が始まったのは、大規模な集落の祭祀が執り行われていたころよりもやや時期が下り、小規模な日常的祭祀が住居内で行われ始めるようになってからと推測する。また、鉄鏃や毛抜き形鉄製品やヤリガンナなどの鉄製品が前年度の調査区から出土しているが、これらが生産された痕跡は確認できていない。D・E地区から出土している黒色土師器は、その器形や製作技法において、在地の日常雑器の中では様相を異にする。焼成段階で炭素を吸着させ窯で焼くことからも、窯の存在は必須である。島内最古の窯である汁谷窯は7世紀後半の操業であることから、島外において生産が行われ搬入された可能性が考えられるが、小規模な窯でも生産可能であるため、島内も視野に含めなくてはならない。しかし、類例の少なさから現段階では生産地の特定は困難である。このような黒色土師器は祭祀遺物が出土した遺跡（ex. 愛媛県出作遺跡・大阪府小阪合遺跡など）から出土している事例があり、祭祀用の特殊な土器とも考えられている。また、これらの遺跡では渡来系遺物の出土がみられることから、渡来人の関与も考えなくてはいけない。前年度の調査から古墳時代中期の竪穴住居を部分的なものも含めると24棟調査しているが、竈の痕跡が確認できたのはA地区竪穴住居6の1棟だけである。この竪穴住居は5世紀後半のものであることから、竈の導入・普及は遅かったものと思われる。しかし、竪穴住居に炉の痕跡を持つものは少なく、移動式竈や戸外における共同調理場の痕跡もみつかっていない。

木戸原遺跡では古墳時代後期の明確な遺構は確認されておらず、おそらく2.7km北に立地する雨流遺跡へと移ったものと考えられる。

律令期にはA地区で一般住居よりやや格上と思われる奈良時代後半～平安時代初頭の掘立柱建物33を確認し、硯片が出土していることから官衙的要素を含む建物の可能性があるといえる。掘立柱建物30・33以外にもA地区には主軸を同じくする建物が多くあるが、出土遺物が少なく同時期であるか明確ではない。

鎌倉時代を中心とした中世の遺構は広範囲に広がっているが、特にA地区東半部で多くの掘立柱建物を確認している。出土遺物から一般的な集落と思われる。

木戸原遺跡が最も栄えた5世紀は歴史書『宋書』倭国伝に記されている倭の五王の時代であり、大山古墳（仁徳天皇陵）を代表とする巨大な古墳が河内を中心に盛行していた。木戸原遺跡のような大集落の首長者層の墓も、ある程度の規模があったと推測できるが、現在までに島内での前方後円墳は確認されていない。今後は大和政権との関係や淡路における墓制・祭祀のあり方・鉄鏃出土の意義・渡来人と韓式系土器など多くの課題を考えていかねばならない。（定松・的崎）

I 区	臼 玉	管 玉
竪穴住居 2	7	4
竪穴住居 3	11	0
遺構20	1	0
遺構37	2	0
遺構106	3	0
遺構107	3	0
遺構111	1	0
遺構128	1	0
遺構129	2	0
遺構132	1	0
遺構168	1	0
合 計	33	4

A 区	臼 玉	勾 玉	有孔円板	ガラス玉	碧玉片
竪穴住居 6	21			1	
竪穴住居 7	20	1			
竪穴住居 9	5		1		有
竪穴住居10	1				
遺構 1	3				
遺構 6	1				
遺構142	7				
遺構490	8				
合 計	66	1	1	1	

C 区	臼 玉
包 含 層	1
合 計	1

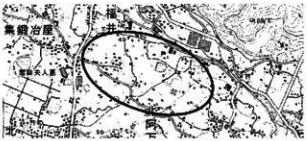
D 区	臼 玉	臼玉未	勾 玉	勾玉未	剣形未	有孔円板	有孔円板未	管 玉	管玉未	ガラス玉	滑石片
竪穴住居 2	112	1	3	1	1	2		1	6	5	有
竪穴住居 3	28	1									有
竪穴住居 4	15	1									有
竪穴住居 5	24									1	有
竪穴住居 6	27	1									有
遺構 1	5			1			1		2		有
遺構 2	1										
遺構21	4								3		有
遺構23											有
合 計	216	4	3	2	1	2	1	1	11	6	

E 区	臼 玉	臼玉未	勾 玉	勾玉未	剣 形	有孔円板	管 玉	ガラス玉	滑石片
竪穴住居 1	38					1		2	有
竪穴住居 2	39				1	2		1	有
竪穴住居 3	58					1	1		有
竪穴住居 4	15								有
竪穴住居 5	20		1				1		有
竪穴住居 6	74		1			1		5	有
竪穴住居 7	21		1	1					有
遺構 4	28								有
遺構10	63	1	2			1	1	1	有
撹乱	1								有
合 計	357	1	5	1	1	6	3	9	

玉 類 一 覧 表

2　久保（くぼ）ノカチ遺跡　－１次調査－　高萩（たかはぎ）遺跡　－３次調査－

所在地	賀集福井字久保ノカチ外
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	坂口弘貴・山崎裕司・谷口梢
種　別	確認調査
調査期間	平成18年６月15日～７月28日
調査面積	736㎡（184ヶ所）



調査の位置

1　調査内容

本調査は、賀集福井地区で計画されている県営圃場整備事業に伴う確認調査である。

調査地は、三原平野を構成する主要河川である大日川上流左岸の標高41.21～67.05ｍを測る南東から北西方向に傾斜する水田からなる。

調査は、東西約１km×南北約0.6kmの範囲に、２×２ｍの調査区を追加も含めて最終的に184ヶ所設定し、重機・人力併用で作業を進めていった。

調査の結果、本地内は耕作土と床土状の土壌を除くと、すぐ直径20cm前後の黒色～茶色系の礫を多量に含む土壌が堆積する調査区が非常に多いことがわかった。礫層が認められる地区は、出土遺物が非常に少なく遺構もほとんど確認できていない。逆にこの礫層が認められない地区では黄色系の土壌が堆積しており、遺構が確認される調査区も西半部を中心に部分的に認められる（Ａ～Ｍ地区）。今回確認した遺構については、調査地東端で南北に大字“福井”と“高萩”の境界があり、高萩地区内にあるＭ地区については、これまで遺跡登録されてきた高萩遺跡、福井地区内にあるＡ～Ｌ地区については、最もまとまって遺構を確認したNo.22調査区が位置する小字名（久保ノカチ）をそれぞれ遺跡名として用いる

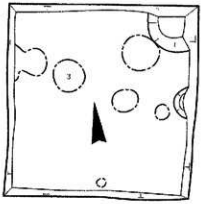
調査区設定図

ことにした。

確認した遺構には、土坑・溝や柱穴等がある。遺物は土師器片が多く、全体的に出土量は少ない。時期的には中世頃が中心と考えられる。調査地内での遺構の分布密度は、調査地西端の県道に近い方が高い傾向にある。その内、E地区のNo.22調査区では、土坑や柱穴と思われる遺構を確認し、小穴3からは室町時代頃の備前焼と思われる擂鉢が出土している。G地区のNo.113調査区では、調査区の東半部において、多量に炭化物を含む土壌を検出した。土師器片が出土しており、時期は中世と考えられる。またL地区では、量的には非常に少ないが、弥生時代中期頃の遺物が出土している。

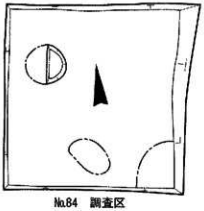
2　まとめ

本調査により、中世を中心として、部分的（L地区）に弥生時代の遺構・遺物を確認することができた。弥生時代については、これまで三原川流域の標高が高い扇央部の調査が進むにつれ、中期の遺跡が点在することがわかってきた。本調査でも僅かではあるが、中期の土器が認められることから、三原川流域と同様な状況を示すと思われる。　（坂口）



No.22　調査区

No.22　調査区　小穴3　出土遺物



No.84　調査区

No.113　調査区

調査区平面図・出土遺物

3　九蔵（くぞう）遺跡　－３次調査－

所 在 地　阿万東町字九蔵外
事 業 名　基盤整備促進事業
担 当 者　山崎裕司・谷口梢
種　　別　確認調査
調査期間　平成18年６月19日～28日
調査面積　84㎡（21ヶ所）

調査の位置

1　調査内容

調査地は南あわじ市の最南端に位置する標高５～10mの低平な地形である。調査地の北側を流れる鵜路川は、現在は本庄川に合流しているが、昔は調査地西側の山裾に沿って海へ流れ込んでいたと伝えられる。調査地北側には弥生時代中期・平安～中世の北山（きたんが）遺跡、南東側には古墳～平安時代のみのこし遺跡が立地する。

平成15年度に分布調査を行い、その結果を受けて確認調査を行うことになった。今回の調査地の北側では平成17年度に確認・本発掘調査を行っており、縄文時代～中世の複合遺跡であることが明らかになっている。同年度に兵庫県教育委員会が県道洲本灘賀集線道路改良事業に伴う本発掘調査を行っており、官衙的な遺跡であることが明らかになった。また和同開珎の銀銭が出土し、新聞報道等で大きく取り上げられている。今回の調査範囲は１・２次調査および県教育委員会調査区の南側に隣接する。

No.１・３～７・９・13～15・20の各調査区で埋蔵文化財の包蔵を確認した。

No.１　深さ約0.8m、検出面での幅は約1.5mの非常に規模の大きな溝である。遺構埋土からはⅠ様式末～Ⅱ様式初頭頃の弥生土器が多数出土している。２層は律令期の包含層で、北東壁の３層および遺構２は律令期の遺構と思われる。

No.３・４・７　律令期の包含層を確認した。出土遺物の大半は製塩土器片が占める。

No.５　柱穴が検出された。埋土から律令期と思われる土師器片が出土している。

No.６・９　律令期の遺構埋土と明らかに違う白～淡灰色の埋土の遺構が検出された。No.９の堆積土の上層部からは15世紀前半頃と思われる土製煮炊具（16）が出土しており、これらの遺構については中世の可能性が高いと考えられる。下層部はあまり遺物を含まず、律令期の遺構は検出されなかった。

No.13・14・20　律令期以前と思われる遺構が検出された。No.13・20では包含層は確認できず、耕地造成の際、削平されたと考えられる。

No.15　律令期の包含層が確認された。堆積土が厚く、湧水が極めて激しい。旧河道や流路等の一部と思われる。

No.１　南東より

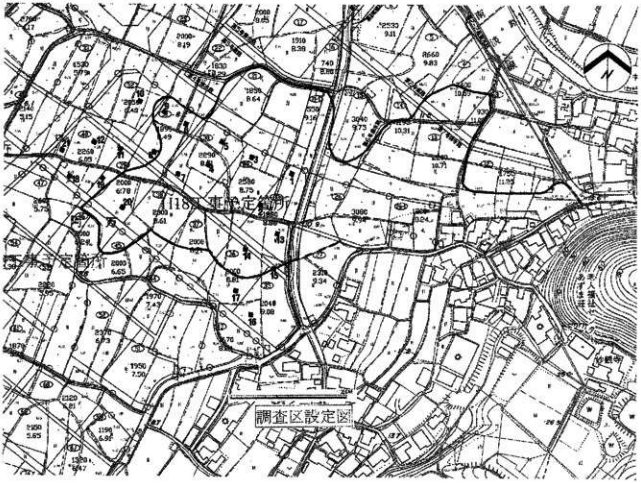
2　まとめ

調査地周辺は東側の山から西へ向かって微高地が張り出しており、この微高地を中心に遺跡が分布している。No.1・3～5・7・13～15・20と広い範囲で律令期の埋蔵文化財の包蔵が確認できた。

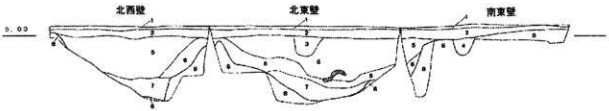
No.1・3・5周辺は前述の県教委調査区に隣接しているため、奈良時代後半頃の官衙遺構群が広がっている可能性が高い。No.15では丸底Ⅲ式（『淡路島の古墳時代』洲本市立淡路文化史料館　1993年）と思われる薄手の製塩土器も出土していることから、南側のNo.15周辺では県教委調査区より先行した時期の遺構等が検出される可能性も考えられる。

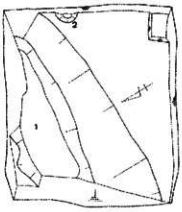
No.1では弥生時代前期頃の大規模な溝が検出され、出土遺物も多かったことから、周辺にこの時期の遺構が広がっていることは確実と思われる。またNo.13・14・20の検出遺構についても、詳細は不明であるが弥生時代の遺構が含まれている可能性がある。

No.6・9周辺では律令期の遺構は検出されなかったが、周辺には中世の遺構が広がっていると推測される。これらの調査区より標高の低い西側の調査区については埋蔵文化財の包蔵が確認できず、低湿地帯が広がっていたと推測される。また南側の調査区No.17は特に湧水が激しく、蛇行しながら西へ続く低い圃場が見られることから旧河道があったと考えられる。　（山崎）



NO. 1





1 2.5Y7/6 明黄褐色砂質土（Fe 少し沈着、床土）
2 10YR4/1 褐灰色粘砂質土（Mn 少し沈着、遺物含む）
3 10YR3/1 黒褐色粘砂質土（Mn 少し沈着、遺構埋土）
4 2と8混じる（遺構2埋土）
5 10YR5/1 褐灰色粘砂質土（Mn 少し沈着、遺構1埋土）
6 10YR5/2 灰黄褐色粘砂質土（Mn 少し沈着、遺構1埋土）
7 10YR5/1 褐灰色粘砂質土（Mn 少し沈着、遺構1埋土）
8 10YR6/6 明黄褐色砂質土（Mn 少し沈着、地山）

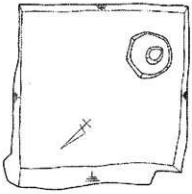
NO. 3

1 2.5Y7/2 灰黄色砂質土（Fe 沈着、床土）
2 5Y7/2 灰白色砂質土（Fe・Mn 少し沈着）
3 10YR3/1 黒褐色粘細砂質土（Mn 少し沈着、遺物含む）
4 10YR4/1 褐灰色粘細砂質土（Mn 少し沈着、遺物含む）
5 10YR5/4 にぶい黄褐色礫混粘砂質土（5～10 cm大の礫、地山）

NO. 4

1 2.5Y7/2 灰黄色細砂質土（Fe 沈着、床土）
2 10YR3/1 黒褐色粘細砂質土（Mn 少し沈着、遺物含む）
3 10YR5/4 にぶい黄褐色粘細砂質土（Fe 少し沈着、地山）

NO. 5

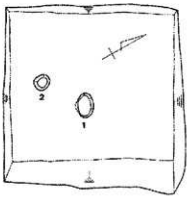


1 2.5Y7/2 灰黄色砂質土（Fe・Mn 沈着、床土）
2 10YR4/1 褐灰色粘砂質土（Mn 少し沈着、遺物含む）
3 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土（Mn・Fe 少し沈着、地山）

0 1 2M

平面・層序図

NO. 6



1　2.5Y7/1 灰白色粘砂質土（床土）
2　2.5Y7/2 灰黄色粘砂質土（Fe少し沈着）
3　2.5Y6/4 にぶい黄色粘細砂質土（Fe少し沈着、地山）

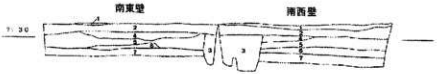
NO. 7

1　2.5Y7/1 灰白色砂質土（床土）
2　2.5Y7/2 灰黄色粘砂質土（Fe・Mn少し沈着）
3　10YR4/1 暗灰色粘砂質土（Mn少し沈着、遺物含む）
4　2.5Y6/4 にぶい黄色粘細砂質土（Mn・Fe少し沈着、地山）

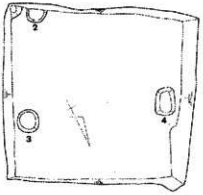
NO. 10

1　2.5Y6/1 黄灰色砂質土（耕土）
2　2.5Y7/2 灰黄色砂質土（Fe少し沈着、床土）
3　2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂質土（10～20 cm大の礫、Fe少し沈着、地山）

NO. 9



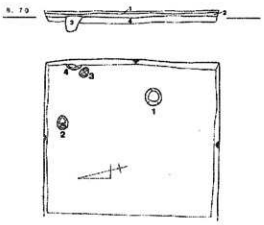
1　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土（耕土）
2　2.5Y7/3 浅黄色砂質土（Fe沈着、床土）
3　2と4混乱状に流じる
4　2.5Y5/1 黄灰色砂質土（炭化物少し含む）
5　2.5Y7/2 灰黄色砂質土（Mn・Fe少し含む、遺物含む）
6　2.5Y5/1 黄灰色細砂質土（Mn少し沈着）
7　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土（地山）



平面・層序図

NO. 13

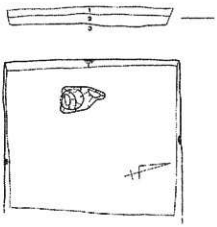
南東壁



1　2.5Y7/1 灰白色砂質土（耕土）
2　10YR5/6 黄褐色砂質土（Fe 沈着、床土）
3　10YR4/1 褐灰色砂質土（遺構４埋土）
4　2.5Y6/6 明黄褐色砂質土（Fe 少し沈着、地山）

NO. 14

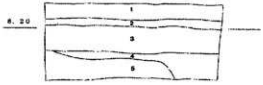
北西壁



1　2.5Y7/2 灰黄色砂質土（Fe 少し沈着、床土）
2　2.5Y5/1 黄灰色砂質土（Mn 少し沈着）
3　2.5YR6/6 明黄褐色砂質土（Fe・Mn 少し沈着、地山）

NO. 15

西壁



1　2.5Y7/1 灰白色砂質土（Fe 少し沈着、床土）
2　2.5Y6/3 にぶい黄色粘砂質土（Fe 沈着）
3　2.5Y5/1 黄灰色礫混粘砂質土（Mn 少し沈着）
4　5Y6/2 灰オリーブ色粘砂（Fe 少し沈着）
5　2.5Y4/1 黄灰色粘砂質土（遺物少し含む）

NO. 17

西壁

1　2.5Y7/1 灰白色粘砂質土（床土）
2　2.5Y6/3 にぶい黄色粘砂質土
3　10YR5/6 黄褐色粘砂質土（Fe 沈着、地山）

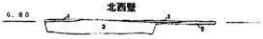
NO. 19

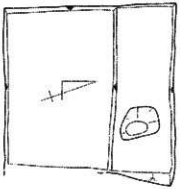
東壁

1　2.5Y7/1 灰白色砂質土（床土）
2　10YR5/6 黄褐色粘砂質土（Fe 沈着）
3　2.5Y6/2 灰黄色粘砂質土（Mn 少し沈着）
4　5Y6/6 オリーブ色粘砂質土（Fe 少し沈着、地山）

NO. 20

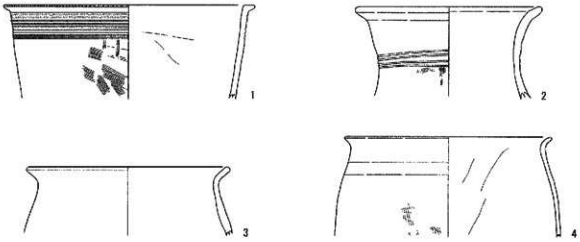
北西壁





1　2.5Y6/1 黄灰色砂質土（耕土）
2　5Y6/6 オリーブ色粘砂質土（Fe・Mn 少し沈着、地山）

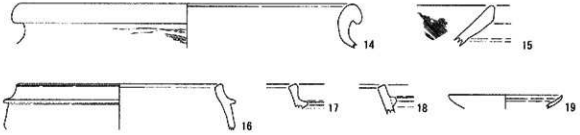
平面・層序図



1～4　No.1　遺構1

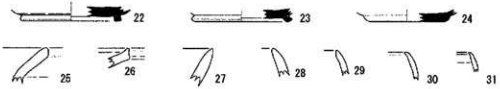
5・6　No.3　3～4層　　7・8　No.7　3層

9・10　No.5　遺構、11～13　No.5　2層



14～19　No.9　上層堆積土

20・21　No.14　1層



22～27・31　No.15　3～4層上部、28～30　No.15　4層

4　九蔵（くぞう）遺跡　－４次調査－

所 在 地　阿方東町字九蔵外
事 業 名　基盤整備促進事業
担 当 者　山崎裕司・谷口栄
種　　別　本発掘調査
調査期間　平成18年７月24日～10月13日
調査面積　約680㎡

調査の位置

1　調査内容

調査地は南あわじ市の最南端に位置する標高５～10mの低平な地形である。確認（３次）調査の結果を受け、Ｂ－２～５地区で本発掘調査を実施することになった。

【Ｂ－２地区】

北東端で中世の遺構群を検出した。遺構９・10ａ・10ｂからは13世紀後半～14世紀前半頃の遺物が出土している。これより南西側では検出遺構は少なく、遺跡の西側境界付近に位置すると考えられる。

遺構10ａ・10ｂは井戸と考えられ、それぞれ深さ約1.2m・１mの底に曲物が設置されていた。断面観察の結果、遺構10ｂが後から掘削されたことがわかった。遺構10ａの曲物の方が残りは良く、遺構10ｂは割れ等の損傷が目立つ。遺構10ａのみ、曲物の周囲に杭が打たれていた。おそらく曲物を固定する意図でなされたと思われる。埋土からは鍾等の木製品も出土している。

遺構９は深さ約0.6mの土坑で、出土土器は比較的残りが良い。また遺構10ａ・10ｂのように粘質の堆積層は見られず単一層であったことから、土器群と共に埋め戻されたのではないかと思われる。

【Ｂ－３地区】

検出された遺構はあまり多くなく、また耕土直下が遺構面で包含層も削平されている。遺構５からは弥生時代前期と思われる土器が出土している。遺構14は不規則な形状の土坑で、律令期の土器とともに鉄屑が数点出土している。

【Ｂ－４地区】

調査区の幅による制約があるが、調査区中央から南東にかけて建物がいくつか復元できた。柱穴からの出土遺物は少なく、詳細な時期は不明である。

ＳＢ01は律令期の建物で、大型の柱穴で構成されおり、官衙的な建物の可能性がある。約N15°Ｅの方位を示し、県教委の本発掘調査区にも同方位の建物が見られる。ＳＢ01の南側には蛇行しながら西へ向かう低い圃場が見られ、基本的には旧河道と推定される。ただし検出した旧河道肩部がＳＢ01と平行していることから、水運等に利用するため護岸の掘削がなされた可能性も考えられる。

遺構148は大型の柱穴と考えられるが、調査区内に対応する柱穴は見られなかった。またＳＢ01とＳＢ02の間の柱穴群は、建物としての復元にはやや無理があるが、ＳＢ01と同方位で並ぶものが見られる。また土坑である遺構16・21からは、製塩土器の丸底Ⅲ式が出土していることから、７世紀頃の遺構が含まれる可能性がある。

遺構（溝）107は、ＳＢ01より真北に近い方位を示す。埋土からは黒色土器碗（21・22）が出土しており、９～10世紀頃と思われる。土器以外に動物の骨片が出土している。遺構107とＳＢ02～07はほぼ

同方位を示すが、遺構107と周辺のＳＢ04～07の柱穴とは埋土が違うことから、時期差がある可能性が高い。建物を構成する柱穴か不明であるが、遺構137からは13世紀後半～14世紀前半頃の鎬連弁文青磁碗（30）が出土しており、ＳＢ04～07は中世の建物群の可能性も考えられる。

これより北西側はＢ－２地区南西側と同様、検出遺構は少なく、遺跡の西側境界付近に位置すると考えられる。

【Ｂ－５地区】

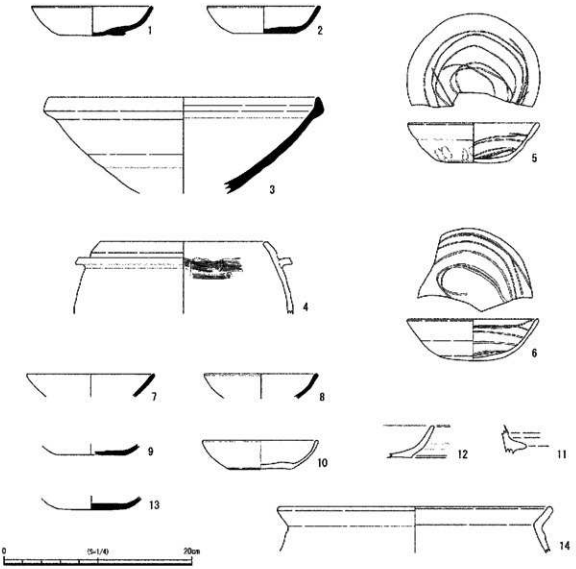
県教委の本調査区に隣接する調査区である。遺構３・４は北東側に続く建物の柱穴ではないかと思われる。

2　まとめ

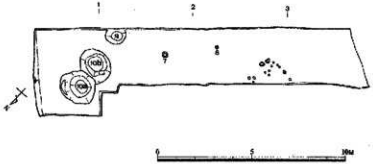
弥生時代前期の検出遺構は全体に少なく、県教委本調査区周辺に比べて遺構の分布は疎らである。

律令期の遺構はＢ－３～５地区で検出できた。Ｂ－４地区についてはＳＢ01のような官衙的な建物も見られる。ＳＢ01を含め、時期的には良くわからない遺構も多いが、７世紀頃と９～10世紀頃の遺構を確認しており、県教委本調査区の中心時期である奈良時代後半とは違う時期の遺構が展開していた可能性が高い。ＳＢ01の南側の旧河道については、海へとつながっていく水運との関わりが考えられる。

Ｂ－２・４地区では中世の遺構が検出された。Ｂ－２地区では井戸等の遺構を確認したが、この西側で行った確認（３次）調査では柱穴状の遺構を検出していることから、屋敷の一角であった可能性もある。また遺構９・10ａから出土した瓦器椀（５・６）は、焼成は瓦器そのものであるにも関わらず、回転台で製作されており、底部も回転糸切で高台をもたない。口径も14cm程度と大きい。12世紀後半～13世紀前半に顕著であった和泉型瓦器椀の影響がみられない。詳しくは類似例を待つ必要があるが、淡路島における瓦器椀の展開を考える上で興味深い資料と言える。　（山崎）

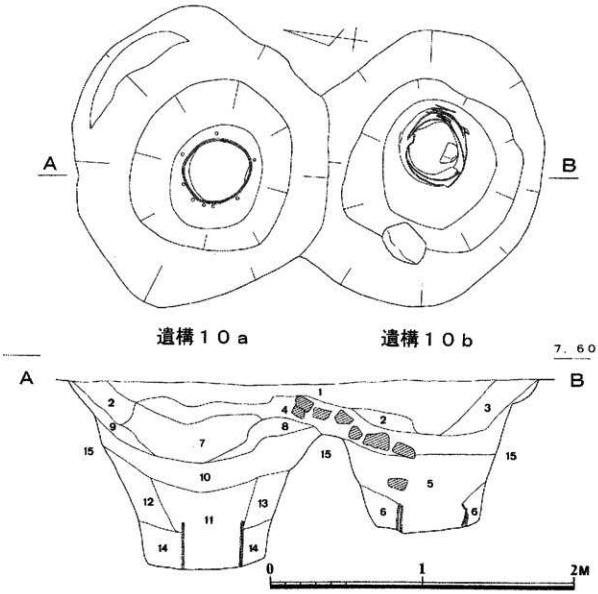


B－2地区　出土遺物（1～5　遺構9、6～11　遺構10a、12～14　遺構10b）



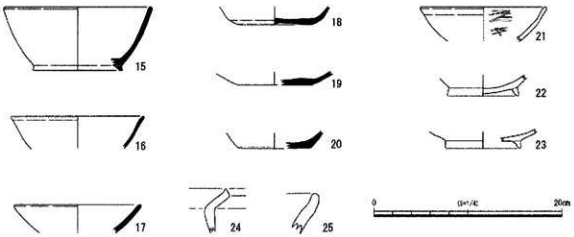
B－2地区　平面図

B－2地区　遺構9
遺物出土状況（南東から）

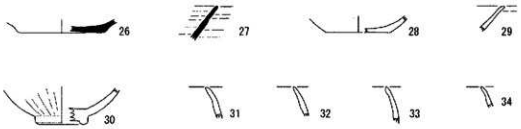


1　5Y7/1 灰白色砂質土（Fe少し沈着）
2　1と3混乱状に混じる
3　10YR4/2灰黄褐色細砂質土（Fe少し沈着，床土）
4　2.5Y5/1 黄灰色礫混細砂質土（10～20cm大の礫，炭少し含む）
5　10YR4/1 褐灰色粘質土と5YR/1 灰色シルト混じる（植物遺体多く含む）
6　5B5/1 青灰色粘砂質土
7　10YR5/6 明黄褐色砂質土と2.5Y5/2 暗灰黄色粘砂質土混じる
8　2.5Y5/1 黄灰色細砂質土と2.5Y5/2 暗灰黄色粘砂質土混じる
9　2.5Y7/1 灰白色砂質土と2.5Y5/2 暗灰黄色粘砂質土混じる
10　5Y6/1 黄灰色粘質細砂質土
11　5Y4/1 灰色粘質土
12　2.5Y7/1 灰白色粘砂質土
13　2.5Y7/1 灰白色砂質土と5Y4/1 灰色粘質土混じる
14　10G5/1 緑灰色礫混粘砂質土（2～5cm大の礫）
15　2.5Y5/6 明黄褐色粗細砂質土（Fe沈着，Mn少し沈着，地山）

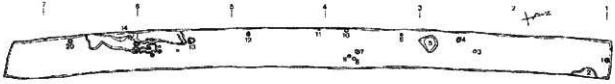
B－2地区　遺構10　平面・層序図



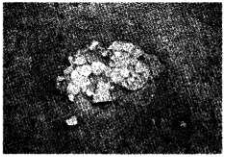
B－4地区　遺構107　出土遺物



B－4地区　出土遺物（26 遺構68、27･28 遺構55、29 遺構61、30 遺構137、31･32 遺構16、33･34 遺構21）

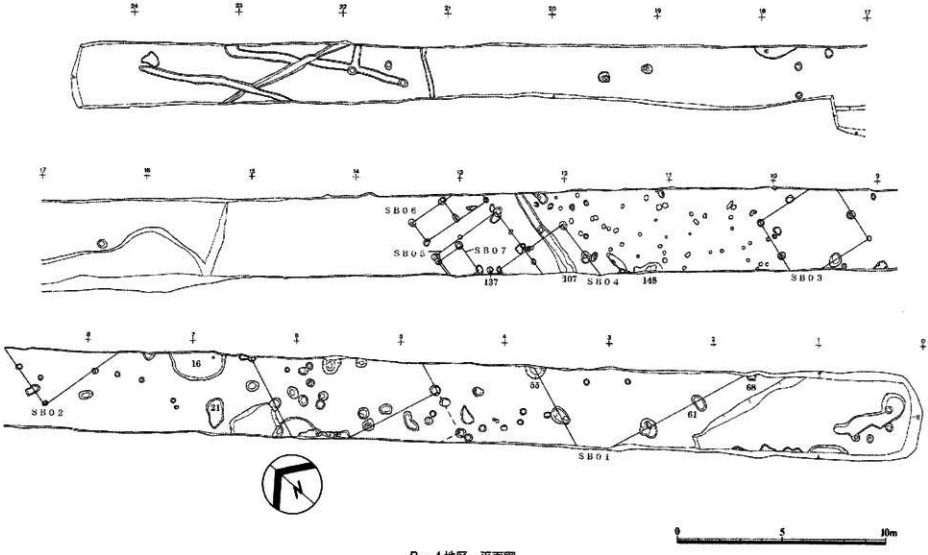


B－3地区　平面図



B－3地区　遺構5
遺物出土状況（西から）

B－5地区　平面図


SB06
SB05
SB07
137
107
SB04
148
SB03
16
21
SB02
53
68
61
SB01
N
0
5
10m

B－4地区　平面図

5　久保（くぼ）ノカチ遺跡　－２次調査－

所 在 地　　賀集福井字久保ノカチ外
事 業 名　　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　　坂口弘喜・山崎裕司・谷口悟
種　　別　　本発掘調査
調査期間　　平成18年８月21日～
　　平成19年３月23日
調査面積　　2,536.7㎡

調査の位置

1　調査内容

本調査は、賀集福井地区で計画されている県営圃場整備事業に伴う本発掘調査である。

調査地である福井地区は、三原平野を構成する主要河川である大口川の上流左岸に位置しており、標高45.05m（１区）～51.72m（２区）を測る。

調査は、先の確認調査成果により、地下の文化財が破壊される部分８ヶ所（１～８区）の面的な調査を進めていった。以下主要調査区の概要を記す。

【３区】

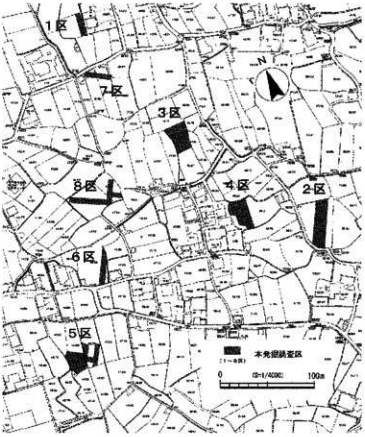
調査地中央に位置する調査区で北半部を中心に土坑・小穴・掘立柱建物（１棟）等を確認した。建物は梁行１間×桁行２間の規模で、柱間は梁行が3.5m前後、桁行が3.0m前後と間隔が大きいことから、復元には疑問が残る。

時期は、建物柱穴や他の遺構出土遺物より、14世紀後半～15世紀頃と思われる。

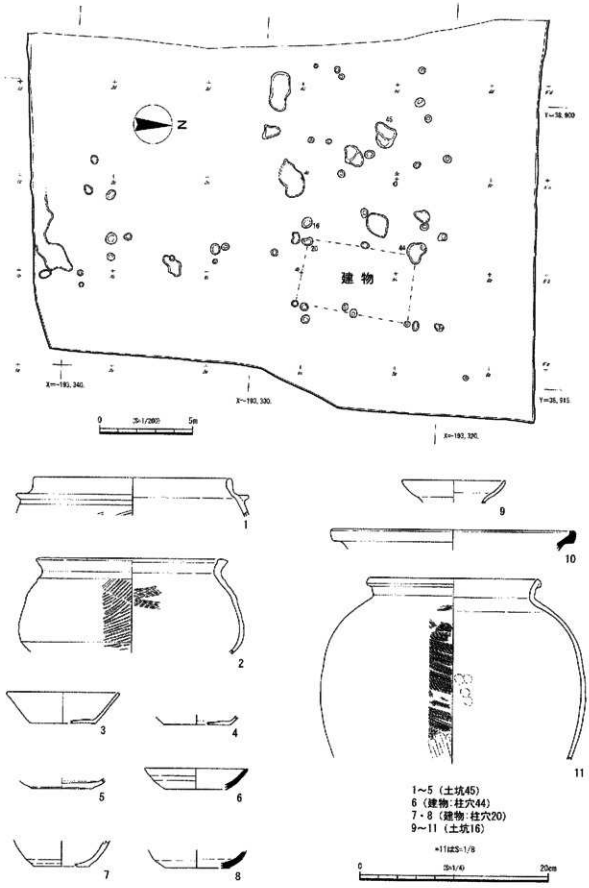
【４区】

調査地東部、現在の集落に隣接する調査区で、工事計画の変更があり、10mあまり南側へ拡張を行った。調査の結果、土坑・小穴・掘立柱建物（３棟）等を確認した。

建物１は梁行１間×桁行１間以上の規模で柱間は1.9～2.1mである。建物２は梁行２間×桁行２間の規模で柱間は1.85～2.2mであるが、北東側の柱間



調査区設定図


N
建物
X=-193,340.
X=-193,330.
X=-193,320.
Y=-38,910
Y=-38,915
0
縮尺1/200
5m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
1～5（土坑45）
6（建物:柱穴44）
7・8（建物:柱穴20）
9～11（土坑16）
※11は縮尺1/8
0
縮尺1/4
20cm

3区　平面図・出土遺物

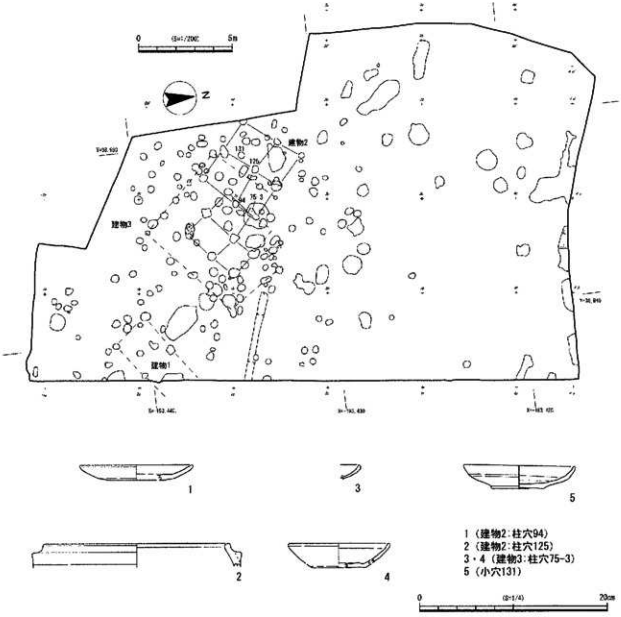
は1.4mと短くなることから、庇等の施設の可能性もある。建物3は梁行2間×桁行2間の規模で柱間は1.6～1.9mとなる。建物2同様北東側の柱間が1.4mとやや短い。また北隅の柱穴が欠損する。1.5m前後外側に柵列状の施設が想定される。

建物の時期については、少量ながらも建物2の柱穴から播磨型の羽釜等が出土しており、15～16世紀頃が想定される。建物1・3もほぼ同時期と思われる。

【5区】

調査地の最も南に位置する調査区で、北西部を中心に遺構が分布する。確認した遺構には、土坑・小穴・溝・掘立柱建物（1棟）等がある。

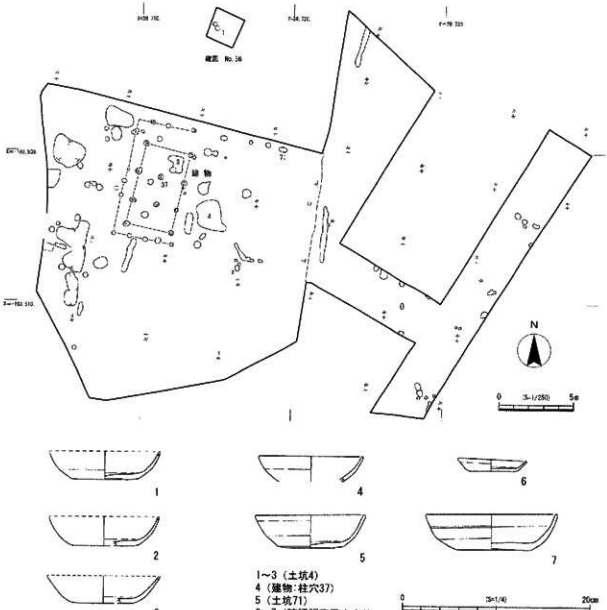
建物は、梁行1間×桁行3間の規模で、内部には床束柱が2本配置される。柱間は梁行が2.95～3.0m、



4区　平面図・出土遺物

桁行が1.6～1.95mとなる。北・西・南の周囲には建物跡の柱穴より深度が浅い柱列が断続的に確認でき、柵列状の区画施設が想定される。建物内の北東部には、部分的に礫が集中する土坑9や東側の屋外には南北2.0m×東西1.5mの土坑4等がある。建物の性格については、作業小屋等の施設が想定される。

出土遺物は、4・8区等とは対照的に煮炊具が皆無で土師器の共膳具が中心となる。時期はおおよそ13世紀後半～14世紀前半頃と考えられる。またこれらの土師器は、口径・器高共に小さい皿と口径・器高が大きい中・大の椀の3種類がセット関係となるものと思われる。

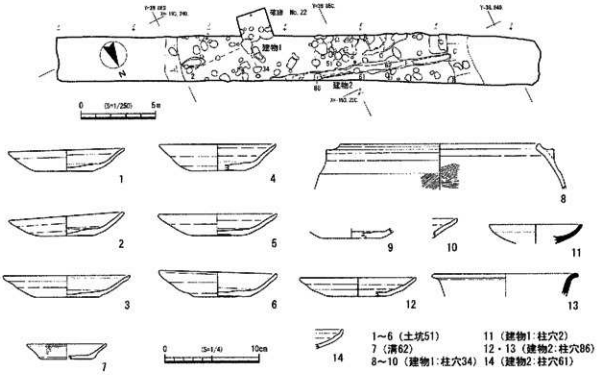


5区　平面図・出土遺物

【7区】

調査地の北方に位置する幅3m、長さ32mの調査区である。遺構は、中央部付近に密集し、土坑・小穴・溝・掘立柱建物（2棟）等がある。建物は調査区幅が狭いため、いずれも全体の規模は不明である。

出土遺物には、土師器・青磁・白磁等があり、土坑51からは6枚あまりの土師器皿が出土した。遺構の時期については、15～16世紀頃と思われる。



7区　平面図・出土遺物

【8区】

調査地中央部に位置する幅3ｍ×延長69mの調査区である。遺構は東半部を中心に分布しており、土坑・小穴・溝・掘立柱建物（3棟）等がある。

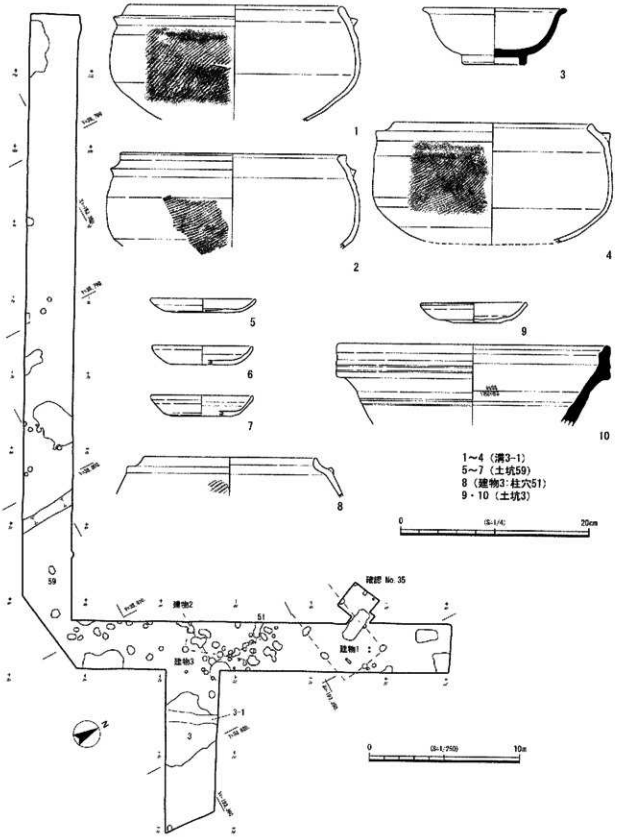
建物1は梁行2間×桁行2間以上の規模で、柱間は梁行が1.7m、桁行が2.0～2.2mとなる。建物2は南北2間以上×東西1間以上の規模で、柱間は1.7～2.0mとなる。建物3は南北2間×東西1間以上の規模で柱間は2.0～2.3mの規模である。建物の南には土坑3がある。土坑全体の規模は不明であるが、南北4.5m×東西4.0m×最大の深さ0.36mあまりの長方形のプランが想定される。また土坑の下には、幅約0.6mの溝3－1があり、層位的に土坑3より古く、溝の方向と土坑の傾きも異なる。

建物や遺構の時期は15～16世紀頃と思われる。

2　まとめ

本調査により弥生時代と中世頃の遺構・遺物を確認することができた。弥生時代については、中期・終末期の遺構・遺物を確認している。先の確認調査では、終末期の遺構・遺物は確認できなかったが、本調査において4・7区でわずかに認めることができた。ただし、いずれの時期も量的には極少量で詳細は不明であるが、周辺に同時期の遺構が存在することが推察される。

一方、建物等遺構の大半は室町時代が中心と考えられるが、東方に位置する高萩遺跡においても一部13世紀後半～14世紀前半に遡る遺物が確認できており（『高萩遺跡－2次調査－』『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』2009年）、今回5区で確認した建物・遺物もほぼ同時期と考えられ、礫層を基盤とする本地内の土地開発も条件的にいい場所は、同時期頃から進められたと考えられる。　（坂口）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1～4（溝3-1）
5～7（土坑59）
8（建物3：柱穴51）
9・10（土坑3）
0
(S=1/4)
20cm
確認 No. 35
建物2
51
建物1
建物3
59
3-1
3
0
(S=1/250)
10m

8区　平面図・出土遺物

6　木戸原（きどはら）遺跡 －6次調査－・立石（たていし）遺跡 －1次調査－

所 在 地　市三條～市福永字立石外
事 業 名　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　定松佳重
種　　別　確認調査
調査期間　平成18年9月25日～11月15日
調査面積　712㎡（178ヶ所）

調査の位置

1　調査内容

本調査対象地は三原平野西～中央部の扇状地上に位置し、標高16.5～41.5mを測る田園地帯である。遺構は基本的に、三原平野扇状地特有の黄色系粘質土を遺構面として検出している。

No.5　黒色系土を遺構面とした遺構を確認した。直径55cm、深さ50cmを測り、建物を構成する柱穴と思われる。遺物は出土していない。

No.32　やや礫の混じる黄色系土を遺構面とした、直径70cm、深さ45cmの土坑を確認した。

No.34　溝と落ち状遺構を確認した。落ち状遺構からは土師質土器片が出土しており、中世と思われる。

No.39　検出した溝からは15世紀後半の備前焼擂鉢が出土した。

No.42　性格不明の落ち状遺構・小土坑を確認した。

No.46　小土坑を確認した。遺物は出土していない。

No.57　浅い溝を確認した。

No.69　落ち状遺構を確認した。

No.79　礫混じりの褐色系土を遺構面とした土坑と遺物包含層を確認した。包含層より凹基式石鏃1点、弥生土器（後期）が多数出土した。南接する圃場に設定したNo.80では遺構は確認されず、包含層も土器出土量はNo.79に比べ非常に少ない。

No.101　小土坑を確認した。

No.142　溝を確認した。包含層から土師質土器小片が出土した。

No.152　落ち状遺構を確認した。遺物は出土していない。

No.160　溝を確認した。遺構埋土は地山である黄色系粘質土のブロックを含み、撹乱を受けていると思われるが、その撹乱は堆積状況から中世以前のものと思われる。遺物は出土していない。

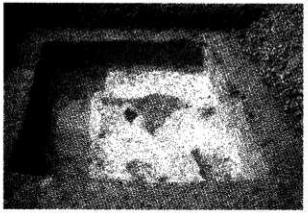
No.166　浅い溝を確認した。遺物は出土していない。

No.174　褐色系砂質土を遺構面とした土坑を確認した。遺物は出土していない。

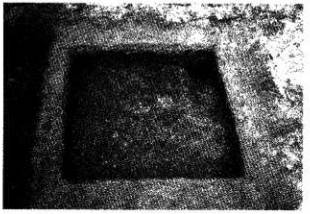
2　まとめ

調査の結果、大きく2ヶ所で遺構・遺物を確認した。県道津名五色三原線より東、泡池周辺までは中世の遺構・遺物を確認し、遺構の分布密度は低いが弥生～中世の遺跡である木戸原遺跡が広がることがわかった。調査対象地東部では中世の遺構・遺物を確認し、中央南側（No.79）では弥生時代後期の遺構・遺物を確認したため立石遺跡とした。南部には弥生時代の遺構が広がると思われる。　（定松）

調査区設定図

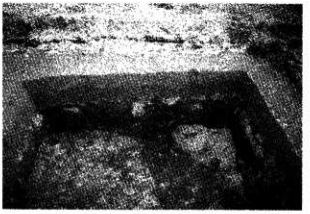


No.42



No.79

No.152



No.160

7　岸ノ上遺跡　－１次調査－

所 在 地	賀集八幡南字岸ノ上外
事 業 名	基盤整備促進事業
担 当 者	坂口弘貢
種　　別	確認調査
調査期間	平成18年10月２日～13日
調査面積	120㎡（30ヶ所）

調査の位置

1　調査内容

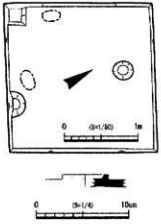
本調査は、賀集八幡南地区で計画されている団体営圃場整備事業に伴う確認調査である。

調査地は、三原平野西部の南辺寺山山裾から平野部にかけての標高11.85～20.28ｍを測る水田からなる。調査は２×２ｍの調査区を30ヶ所設定し、重機・人力併用で進めていった。

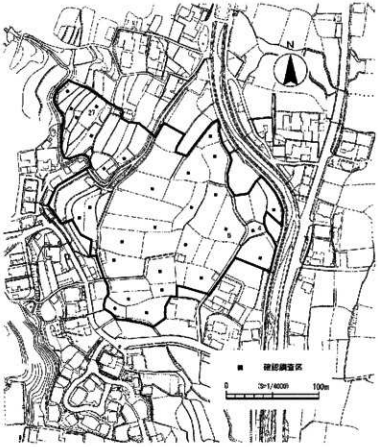
調査の結果、大きく２つの範囲において、遺構または遺物包含層が確認できた。No.４調査区では古墳時代～古代にかけての遺物包含層、No.５調査区では古代と中世前半頃の遺構を確認した。また、No.27調査区では須恵器・土師器・黒色土器を含む平安時代中頃の遺物包含層を確認した。

2　まとめ

本調査により、調査地東部の微高地（No.４・５）周辺と南辺寺山山裾（No.27）周辺部分において、古墳時代・古代・中世前半頃の遺構又は遺物包含層を確認することができた。なお、野菜の作付等により、実施できなかった部分もあることから、今後補足の確認調査が必要と考えられる。（坂口）



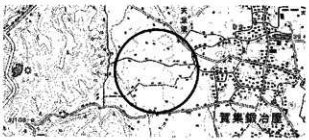
No.５　平面図・出土遺物



調査区設定図

8　才門・石田・神子曽遺跡　－１次調査－

所 在 地　賀集鍛冶屋字才門外
事 業 名　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　山崎裕司
種　　別　確認調査
調査期間　平成18年10月18日～平成19年２月５日
調査面積　約368㎡（94ヶ所）



調査の位置

1　調査内容

調査地は三原平野南西端に位置し、諭鶴羽山系から派生する扇状地末端に広がる田園地帯である。調査地内を大日川支流の山路川が北方向に流れる。

調査地北東側には明治３年に治定された第47代淳仁天皇陵が隣接するが、淳仁天皇陵は他にも諸説あり定かではない。調査地の東限となる洲本灘賀集線（阿万バイパス）道路改良事業に伴い、才門・石田・神子曽遺跡の発掘調査が兵庫県教育委員会によって行われた。特に神子曽遺跡では縄文時代の土坑や弥生時代の周溝墓が確認されるなど大きな成果があった。

平成16・17年度に当事業に伴う分布調査を行っており、その結果を受けて確認調査を行うことになった。90ヶ所については２×２ｍで調査を行ったが、４ヶ所については野菜の作付け後であったため、地元との調整の結果、１×２ｍで調査を行った。

№112・113・119・128・129で埋蔵文化財を確認した。このうち№113・119・129が１×２ｍの調査区である。

№113では、上記県教委の調査で検出された低湿地の続きと思われる落ち（５・６層）を確認した。律令期と思われる遺物を含む。№112は地形的に谷筋に位置しており、出土遺物は少ないが低湿地の続きと思われる堆積層を確認した。

これらの調査区とやや距離をおいて、№128を中心とする遺跡範囲が確認された。№128では遺構が検出され、遺構埋土から律令期と思われる土器片が出土している。№129では南北方向の溝が検出された。ただし出土遺物は無く、時期は不明である。№119では出土遺物は少ないが、包含層を確認している。

№71・92は石田遺跡に最も近い調査区であるが、ともに埋蔵文化財は確認できなかったため、事業対象地内に遺跡が大きく広がることはないと判断される。

№７・68は神子曽遺跡に最も近い調査区であるが、№７は表土直下が地山面で開発による削平を受けており、№68は低湿地であったことを示す厚い堆積土が見られたため、事業対象地内には神子曽遺跡は広がらないと判断される。

2　まとめ

調査地内には東から西に向かって蛇行する周囲よりやや低い畑場が幾通りか見られ、旧河道があったと推定される。また低湿地状の土壌堆積を示す調査区も多く、水の影響を受けやすく、水はけも悪い場所で、居住に適した場所は少なかったと推定される。

今回、埋蔵文化財を確認した才門遺跡のNo.128を中心とする範囲は、旧河道地形の間にあり、微高地が最も広がっている場所である。最も地形条件の良いこの場所にのみ遺跡が立地できたのであろう。ただし遺物の出土量は少なく、また県教委の調査のような官衙的な遺物は出土していない。律令期の小規模な遺跡であると推測される。

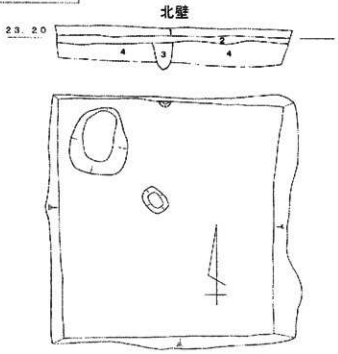
前述のように、石田・神子曽遺跡は洲本灘賀集線の南西側には大きく広がらないことがわかった。

(山崎)

NO. 113

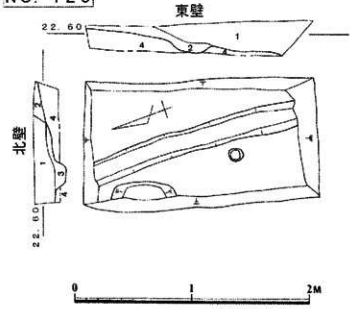
1 耕土
2 2.5Y6/1 黄灰色砂質土（床土）
3 5層と2層様相状に混じる
4 5層と7層混じる（炭り粒含む）
5 2.5Y3/1 黒褐色粘砂質土（遺物少し含む）
6 2.5Y4/1 黄灰色粘砂質土（炭り粒含む）
7 2.5Y6/6 明黄褐色粘質砂質土（2～5cm大の礫、炭り粒含む、地山）

NO. 128



1 10YR6/1 褐灰色砂質土と 10YR6/8 明黄褐色細砂質土混じる（Fe少し沈着、床上）
2 10YR5/1 褐灰色砂質土（遺物多く含む）
3 2.5Y6/1 黄灰色砂質土と5層混じる（遺構埋土）
4 2.5Y6/8 明黄褐色粘砂質土（Fe・Mn少し沈着、地山）

NO. 129



1 2.5Y4/1 黄灰色砂質土と3層攪乱状に混じる（近世の遺物含む）
2 3層と4層攪乱状に混じる
3 2.5YG/1 黄灰色砂質土（Mn少し沈着）
4 2.5Y7/6 黄色砂質土（Mn沈着、地山）

平面・層序図

9　中島（なかしま）遺跡　－２次調査－

所 在 地　北阿万伊賀野字中島
事 業 名　基盤整備促進事業
担 当 者　坂口弘貴
種　　別　本発掘調査
調査期間　平成18年11月13日～30日
調査面積　359㎡

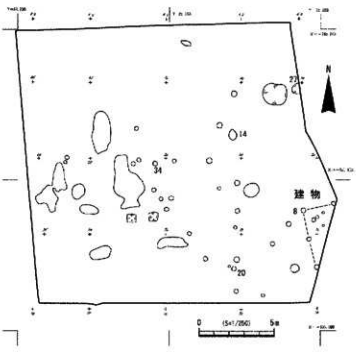
調査の位置

1　調査内容

本調査は、上記の北阿万伊賀野地区で計画されている団体営圃場整備事業に伴う本発掘調査である。

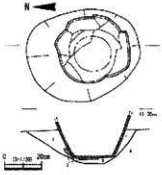
調査地である北阿万伊賀野地区は、三原平野と阿万の平野部との中間地点に位置しており、調査地北側に隣接して稲田川が東から西方向に流れる。調査は、地下の遺跡が破壊される部分を対象に重機・人力併用で進めていった。

調査の結果、耕作土の約10～20cm下で遺構を確認した。遺構は西半部に大型の遺構が、中央から南東部にかけては小さな遺構が分布する。ただし、西半部のベースが黄色系の粘質土になるのに対して、中央付近は礫を多量に含んだ土壌となり、明確な遺構か判断しかねるものが多い。その内、小穴20・34では非常に少ないが、室町時代と思われる土師器片が出土している。



調査区平面図

土坑14（西より）

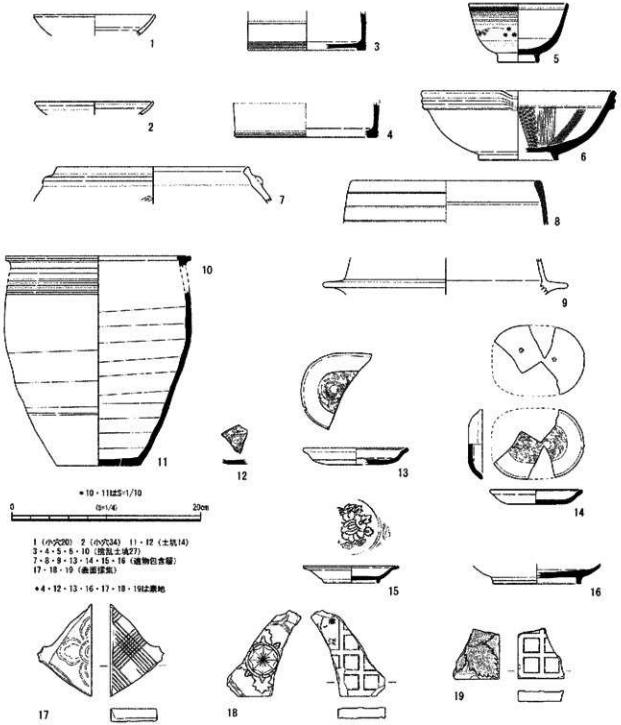


調査区の南東隅において、東西１間以上×南北２間以上の掘立柱建物を１棟確認した。柱間は南北1.9m、東西2.0mを測る。各柱穴の掘方は、平面形が直径35cm前後で円形をなす。遺物は、柱穴８から図化不可能な土師器片が２点出土しており、時期は近世以降と思われる。また建物の北西約７ｍの地点３ｂ区において、大谷焼が埋設されたトイレ遺構と考えられる土坑14を確認した。内面には付着物が目立ち、底部に亀裂がはいるが、外面に粘土が貼られていた。時期は近世末から明治時代頃と思われる。採集資料に「淡陶株式会社」で生産され

た厚さ1.4cmの湿式タイル（17）と1.0cm前後の乾式タイル（18）がある。裏面にはそれぞれクシ目と格子目＋千鳥の刻印が残る。タイル生産は明治40年～明治末に湿式から乾式タイルへと変化し（『琵琶平焼窯跡』兵庫県教育委員会2005年）、これらの資料は過渡期に作られた資料と考えられる。

2　まとめ

本調査により、中世と近世末から近代にかけての遺構を確認した。中世については判然としないが、近世末から近代にかけては掘立柱建物やトイレ遺構など集落の一部を確認したと考えられる。（坂口）



出土遺物

2010年3月19日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ

2006年度　埋蔵文化財調査

発行　南あわじ市教育委員会

編集　南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙1100

TEL 0799-42-3849

印刷　浜田タイプ

〒656-0521 兵庫県南あわじ市瀬美台2丁目6-5

TEL 0799-52-1080